

# 乳幼児向けコンサートによるリズムを中心とした 音楽教育プログラムの構成と評価 —「京女こどもコンサート」を事例として—

坂 本 光 太  
(教育学科助教)

本研究は「京女こどもコンサート」を事例に、リズムを中心とした乳幼児向けの音楽教育プログラムの構成と評価を行った。コンサートを、体験セッション、鑑賞セッション、教育セッションに分けて実施し、音楽を聴いて楽しむだけでなく、手拍子や指揮体験を通じて子どもたちが能動的に音楽に関与する機会を提供した。ビデオ観察データおよび保護者アンケートの分析により、子どもたちの高い参加意欲と満足度が確認された。リズムを軸とした多角的な音楽体験が子どもたちの音楽理解と興味を促進し、このようなコンサート形式が効果的な教育手段であることが示唆された。今後は、年齢別の発達段階に合わせた調整、長期的効果の検証が課題となる。

キーワード：幼児教育、参加型コンサート、指揮者体験、リズム、オーケストラ

## 1. はじめに

幼児教育では、子どもの音楽的能力だけでなく、運動機能や言葉との関連性からも、リズムが重要な役割を果たすとされている。エミール・ジャック＝ダルクローズが提唱したリトミックは、身体を通じてリズムを体感しながら音楽理解を深める方法論として広く知られ、リズムの教育的意義を早くから示してきた（ダルクローズ，2003；岩崎，2012）。また、日本の幼稚園教育要領では、1956年から約30年間にわたり、「音楽リズム」が教育内容の一領域として明確に位置づけられ、幼児教育に欠かせない要素として重視されてきた（稲生，2021）。

保育園や幼稚園などの現場では日常的にリズム遊びや音楽遊びが行われ、子どもたちがリズムに触れる機会は少なくない。一方で、家族とともに安心して参加できる音楽体験の場は依然として限られている。また、乳幼児期に生演奏やコンサートを通じて音楽に触れることは、子どもの発達に有用であると考えられるが、こうした機会を容易に得ることは難しい現状がある。

そのような現状を踏まえ、本研究は、リズム

を軸とした乳幼児向け音楽プログラムを、より広いアウトリーチが可能な無料のコンサートという公共性の高い形式で実施することを試みる。コンサートは家庭や保育現場に留まらず、地域社会全体へと音楽体験を波及させる力を持ち、より多くの子どもや保護者が参加・鑑賞する機会を提供できる。

本研究では、2024年8月2日に京都幼稚園（学校法人京都女子学園）で開催された「京女こどもコンサート」を事例として取り上げ、コンサート中の記録ビデオの観察および保護者アンケート結果を分析することで、年齢別の反応やプログラム構成の妥当性を検証する。これにより、リズムを中心とした乳幼児向け音楽プログラムが、子どもたちの音楽的理解や興味喚起にいかにか効果的であり、コンサートという形式がアウトリーチの手段としてどのような可能性を持つかを明らかにすることを目指す。

本稿の構成を述べる。ここでは、まずリズムに注目した乳幼児向け音楽教育の意義と課題を概観し、コンサート形式を選択した理由と研究目的を提示した。2では「京女こどもコンサ

ト」の概要、プログラム構成を整理する。3ではコンサート進行に沿って各曲やMCの内容などを紹介し、各セクションが乳幼児の興味をどのように促しているかを具体的に記述する。4では、ビデオ観察データと保護者アンケート結果を用いて、体験・鑑賞セクションが乳幼児に与えた影響を分析し、プログラムの妥当性を考察する。5ではアンケートによる総合評価を行い、本コンサートが乳幼児期の音楽的発達に果たす役割と意義を総括する。「おわりに」で研究の知見をまとめ、今後の課題と展望を示す。

## 2. コンサートの概要・目的・構成

### 2.1 概要（図1）

名称：乳幼児のための京女こどもコンサート

日程：2024年8月2日（金） 10:30-11:30

会場：京都幼稚園 文中ホール（京都市東山区）

対象：乳幼児と保護者

主催：京都幼稚園（京都女子学園）

出演：京都女子大学交響楽団約25名（大学公認サークル） 同大発達教育学部教育学科音楽教育学専攻管楽器ゼミ3回生4名（坂本ゼミ）

指揮：坂本光太

プログラムデザイン：向朱理

来場人数：56組（乳幼児72名、小学1～3年生8名、大人86名、合計166名）

### 2.2 コンサートの目的

本コンサートは、乳幼児が家族とともに安心して参加できる音楽体験の場を提供することを目的として企画された。現状では、乳幼児が入場可能なコンサートは非常に少なく、幼い子どもを連れた家族が音楽に触れる機会が限られている。そのため、本コンサートでは、子どもたちが自由に参加できる雰囲気大切にしながら、音楽の魅力を身近に感じてもらえるよう工夫を凝らした。

内容については、特にリズムという音楽の根幹的要素に注目し、生演奏を通じてその楽しさを体感できる機会を設けることで、子どもたちの感性を刺激し、音楽への興味を喚起することを目指した。また、幼児教育や音楽教育との関

連性を重視し、体験・鑑賞・教育の要素をバランスよく取り入れることで、子どもたちが楽しみながら音楽に親しむ機会を提供するとともに、家庭や教育現場での音楽的体験の広がりを促すことを期待している。

### 2.3 プログラム構成

本コンサートでは、乳幼児の年齢や興味に合わせた多様な音楽体験を提供するため、以下の3つのセクションに分類し、それぞれに異なる目的を持たせた。

#### ○体験セクション

このセクションでは、子どもたちが能動的に音楽に関わることができるような仕掛けを盛り込む。指揮者体験、手拍子や掛け声を活用したアクティビティを中心に構成し、リズムを基盤とした身体的な体験を通じて、音楽の楽しさを直感的に感じられるよう工夫した。特に、音楽を「聴く」だけでなく「参加する」ことで、子どもたちが自発的に音楽と向き合うきっかけを提供する。

#### ○鑑賞セクション

このセクションは、子どもたちが音楽に耳を傾け、それを味わう時間として設ける。

#### ○教育セクション

楽器のことについて学びながら楽しめるセクションとして設定。楽器を紹介することによって、音色や楽器、その構造に対する知識・関心をより深くすることを目指す。

本コンサートでは、乳幼児が親しみやすく、関心を引きやすい曲目を選曲することに特に注意を払った。また、子どもたちが自然と音楽に引き込まれるよう、楽曲の親しみやすさやリズムの面白さを重視し、教育的要素を取り入れることで、楽しさと学びを両立させる工夫を行った。

内容の一覧およびセクション分類は表1参照のこと。

（次ページ）図1 演奏会プログラム（裏表）<sup>1</sup>

### 出演者

オーケストラのお姉さんたち  
♪ 京都女子大学 交響楽団

フルート	住吉 咲来、高津 百々葉
オーボエ	塩井 涼佳☆
クラリネット	木内 菜々美、高橋 優芽、作田 萌祇
ホルン	新宮 里緒、吉川 日奈子、直江 晴加☆
トランペット	松本 花（兼ヴィオラ）、藤野 里音
トロンボーン	五反田 優芽
チューバ	砂田 唯子
ヴァイオリン	松島 綾香、松下 華奈、森 愛結、岸田 紺、仲田 祐美子
チェロ	山崎 晴子☆
コントラバス	中 瑞月、小澤 一葉、愛宕 里紗☆
パーカッション	恒石 綾香
	由良 菜花☆、川原 光結☆ ☆賛助出演

楽器のお勉強をしているお姉さんたち  
♪ 京都女子大学 発達教育学部 教育学科 音楽器ゼミ（坂本ゼミ）

アルト／テナー・サクソ	大西 結歌
クラリネット	坂平 若菜
バリトン・サクソ	清水 紗弥
トロンボーン	中西 響愛

♪ 企画／指導／指揮：坂本光太（京都女子大学 発達教育学部 助教）



## 京女 こどもコンサート 2024

# プログラム

2024年  
**8月2日**（金）  
10:00開場 10:30開演（11:30終演予定）  
出演：京都女子大学交響楽団、発達教育学部教育学科音楽器ゼミ  
主催：学校法人 京都女子学園 京都幼稚園  
協力：京都女子大学 発達教育学部

### ごあいさつ

みなさん、ようこそ、京女こどもコンサートへ！今日は、泣いても、笑っても、歌っても、踊っても大丈夫。どうかリラックスして楽しんでください。

こどもには、音楽の魅力を感じ取る力があります。しかし、こどもが生演奏を直接体験できる機会はそう多くありません。そこで、幼稚園から大学院まで揃う京都女子学園の利点を活かして、乳幼児と保護者の方に、大学生によるオーケストラや音楽器アンサンブルの演奏を楽しんで頂けるコンサートを企画しました。演奏を聴くだけでなく、手拍子をしたり、体を動かしたりすることで、音楽の楽しさを体験してくださいね。

このコンサートが、音楽や楽器への興味を持つきっかけとなることを願っています。さあ、はじめましょう！

  
 坂本光太(指揮)

### プログラム

オーケストラ  
しってるきょく、あるかな？  
♪ 〈ジブリメドレー〉 久石譲作曲／天野裕美子編曲

音楽器アンサンブル  
いっしょにからだをうごかそう！  
♪ 〈どんな色が好き？〉 坂田修 作詞作曲 ●

♪ 〈手をたたきましょう〉 童謡・小林純一 作詞 ●

♪ 〈おもちゃのチャチャチャ〉 野坂昭如 作詞／越部信義 作曲 ●

♪ 〈勇氣100%〉 光GENJI・松井五郎 作詞／馬飼野康二 作曲 ●

オーケストラ 音楽器アンサンブル  
いろんながっきをみてみよう！  
♪ 『楽器紹介コーナー』 〈きらきら星〉 ほか

オーケストラ  
オーケストラといっしょにえんそう！  
♪ 『指揮者体験コーナー』 〈さんぽ〉を指揮してみよう！  
みんなの中から数人は、舞台上がってふれるよ！

はやくなったり・おそくなったり！  
♪ 〈ハンガリー舞曲 第5番〉 J. ブラームス 作曲

オーケストラ 音楽器アンサンブル  
♪ 〈マツケンサンバII〉 宮川彬良 作詞作曲 ●●

● 藤野里音（京都女子大学大学院 表現文化専攻）編曲  
 ● 松本花（京都女子大学大学院 表現文化専攻）編曲

表1 内容の一覧およびセッション分類

曲順	曲名など	演奏	セッション
(1)	《ジブリメドレー》	交響楽団	鑑賞セッション①
(2)	《どんな色がすき》	管楽器ゼミ	体験セッション①
(3)	《手をたたきましょう》	管楽器ゼミ	体験セッション①
(4)	《おもちゃのチャチャチャ》	管楽器ゼミ	体験セッション①
(5)	《勇気100%》	管楽器ゼミ	鑑賞セッション②
(6)	楽器紹介	両者の合同による	教育セッション
(7)	指揮者体験	交響楽団	体験セッション②
(8)	《ハンガリー舞曲 第5番》	交響楽団	鑑賞セッション②
(9)	《マツケンサンバ II》	両者の合同による	鑑賞セッション③

### 3. 各曲（各セッション）の進行と詳細

以下は、実際のコンサート進行に沿って曲目およびMC（進行役）による司会（MC）内容をまとめたものである。先述のように、楽曲を「体験セッション」「鑑賞セッション」「教育セッション」の3種に大別し、それぞれの特性を踏まえて記述する。

#### (1) 《ジブリメドレー》（鑑賞セッション①／約5分） 久石譲作曲／天野裕美子編曲（一部抜粋）

演奏：京都女子大学交響楽団（25名程度）

開演曲として、観客に馴染み深いであろうジブリ映画の主題歌・挿入歌をメドレー形式で演奏した。内容曲は《さんぽ》《となりのトトロ》《崖の上のポニョ》の3曲。このセッションは「鑑賞」の位置づけであり、子どもたちは静かに耳を傾け、メロディやハーモニーをゆっくり味わうような場面となった。華やかなオーケストラ・サウンドが会場に響くことで、コンサートの幕開けとしての雰囲気づくりに貢献した。

指揮者 MC：「みんな！今日は来てくれてありがとう！まずは、オーケストラと一緒に、みんながよく知っているジブリの音楽からはじめます。この音楽では、お口でしゃべらないで、みんなのお耳だけを、よ～く使って、静かに音楽に耳をすませてみてね！知っているメロディーが出てきたら心の中で歌ってみよう！」

#### (2) 《どんな色がすき》（体験セッション①／約2分30秒） 坂田修作詞作曲／藤野里音編

曲、演奏：管楽器ゼミ（4名 Cl. T. Sax. B. Sax. Tb.）

多くの色の名前が歌詞に含まれる楽曲。「どんな色がすき？」という問いかけに、子どもたちが「赤！」「青！」など、声に出して応答しやすい構造を持つ曲である。体験セッションとして位置づけられ、子どもたちが能動的に関わることを狙った。単純な問いかけと応答のやりとり（コールアンドレスポンス）により、子どもが楽しみながら音楽へ参加するきっかけを提供した。

学生 MC：「次の曲は、みんながきっと一度は歌ったことがある《どんな色がすき》です。まずちょっとだけ吹いてみるね！（メロディーを一部演奏）今、出てきた『赤！』のところ、みんなわかったかな？それじゃあ一緒に歌って、みんなの好きな色を聞かせてね！」

#### (3) 《手をたたきましょう》（体験セッション①／約2分） 童謡・小林純一作詞／松本花編曲、演奏：管楽器ゼミ

手拍子を打つことでリズムに直接関わることのできる曲である。子どもたちが身体を使って音楽に参加し、テンポや拍子をより直感的に感じることを狙いとしている。ここでは、子どもの単純な動作（手をたたくこと）が、自然な形で音楽表現の一部となる（体験セッション）。

本曲は同一のメロディーを3回繰り返して演奏する構成だが、本コンサートでは各反復の際に異なる動物キャラクターが登場する演出が加えられた。最初の1回目は通常のテンポと音域で演奏し、子どもたちは基本的なリズムに合わ

せた手拍子に取り組む。次いで2回目は「ゾウさんがきたよ〜！」の掛け声が用いられ、テンポを遅くして音域を下げ、重々しく低い響きで演奏される。最後の3回目には「リスさんがきたよ〜！」の掛け声が挿入され、今度はテンポを速くして音域を上げ、軽快で高い響きによって、子どもたちが活発なリズム体験を得られる工夫を行った。

学生 MC：「次は《手をたたきましょう》です。みんなこの曲、知ってるかな？“タンタンタン”のところで、一緒に手をたたいてみよう！お姉さんが合図するから、真似してみよう。（練習：たんたんたん…たんたたたん）うまくできた？ところで、途中でいろんな動物さんがきてくれるみたいだよ？どんな動物さんがきてくれるのかな？それじゃあ本番、いってみよう！」

**(4) 《おもちゃのチャチャチャ》(体験セッション①/約2分)** 野坂昭如作詞/越前信義作曲/松本花編曲、演奏：管楽器ゼミ

「チャチャチャ」を合図に、子どもたちが手拍子や体の動きで関わることのできる曲。親しみやすい旋律とリズムが特徴で、子どもには自然と身体を揺らす、手を叩くなどの反応が起こりやすい。MCが「チャチャチャ」の部分を示し、リズム打ちの練習を挟むことで、参加行動を誘導していた。

学生 MC：「次は《おもちゃのチャチャチャ》です。この曲は夜になるとおもちゃたちが踊りだす、とっても楽しい曲だよ！“チャチャチャ”の部分で手をたたいてみましょう。（リズム練習を行う）よし、上手！それじゃあ一緒にやってみよう！」

**(5) 《勇気 100%》(鑑賞セッション②/約4分30秒)** 光 GENJI・松井五郎作詞/馬飼野康二作曲/松本花編曲、演奏：管楽器ゼミ

アニメ『忍たま乱太郎』の主題歌として知られる元気な曲調の楽曲で、今回は「鑑賞セッション」として選曲した。ここでは、子どもた

ちは手をたたくななどの直接的な参加は求められず、伸びやかなメロディと明るい雰囲気を楽しむことが想定されていた（後述）。

学生 MC：「次は《勇気 100%》です！みんなも聞いたことがあるかな。ここではゆっくり座って、元気いっぱいの音楽を楽しんでみてね。」

**(6) 楽器紹介(教育セッション/約10分)**

管・弦、さまざまな楽器を実際に音を出しながら紹介することで、子どもたちが楽器の音色や特徴を感じ取れるような場面を用意した。演奏者が舞台上で順に楽器を示し、その特徴をわかりやすい言葉で説明し、続けて短い音楽フレーズを演奏することで、子どもたちは耳と目を使いながら楽器の構造と各楽器の音色を視覚的にも楽しめるように工夫した。

例えばサクソフは、金色に光る楽器を子どもたちに見せながら「息をゆっくり入れると、キラキラな音がひろがるよ」という簡潔な説明とともに、《ふたたび》(久石譲作曲)の印象的なフレーズを演奏した。クラリネットは黒く細長いボディを示し、「息をそっと送りこむと、あまい音が出るんだよ」と伝えてから、《海の見える街》(久石譲作曲)を用いてその柔らかな音色を聴かせた。トロンボーンでは、スライド部分を前後に動かす特徴に注目し、「息をふきこんでスライドを動かすと、のびたりちぢんだり面白い音が聞こえるよ」と説明。実際にグリッサンドを実演し、子どもたちはその独特の音程の変化に笑っていた。トロンボーンは《夢をかなえてドラえもん》(黒須克彦作詞作曲)を奏した。

ついで、銀色のフルートと細いリードを使うオーボエが登場する。MCは「フルートは高くすんだ音、オーボエは『ピーッ』とすっきりした音が出るよ」と紹介し、《星に願いを》(ネッド・ワシントン/リー・ハーライン)の旋律をフルートとオーボエで演奏し、2つの音色の違いをはっきりと感じさせた。ホルン(唱歌《かたつむり》)はぐるぐる巻いた形状がユニークで、「やさしく空気を送りこむと、まるいあた

たかい音がひろがる」という言葉通り、柔和な響きが会場に漂った。続くチューバ（《ぞうさん》まどみちお作詞／團伊玖磨作曲）は、その大きさと低い音域で注目を集め、「おなかにひびくおおきな低い音がでるよ」との説明通り、どっしりとした低音を鳴らし、子どもたちに「象」を想起させた。

最後に、弦楽器を紹介した。4種類の弦楽器が《きらきら星》のメロディーを順々に奏で、その大きさや形状の違いが音色や響きの質に影響することを、子どもたちは体感することができた。楽器紹介についてはプログラム冊子に補足的なコーナーを掲載し、家に帰っても見返せるように配慮した（図1 左下）。

指揮者による弦楽器紹介 MC（抜粋）：

「みんな、この楽器を知ってるかな？そう、ヴァイオリンだね！じゃあ、その隣にあるバイオリンよりちょっと大きい楽器はわかるかな？これは“ヴィオラ”っていうんだよ。並べてみると、ヴァイオリンより少し大きいでしょ？

次に、さらに大きな楽器は“チェロ”だよ。チェロは座って弾くんだ。そして、一番おおきな楽器は“コントラバス”。とっても大きいよね！

それじゃあ、ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ・コントラバスが、どんな音を出すか聞いてみよう。みんながよく知っている『きらきら星』のメロディーで演奏します！」



写真1 楽器紹介の様子

#### (7) 指揮者体験（体験セッション②／約 10 分）

演奏：京都女子大学交響楽団

「指揮」という行為を通して「拍子」「テンポ」「ジェスチャー」を子どもにもわかりやすく示す試みである。MC（指揮者）は、冒頭に演奏されたメドレー中の《さんぼ》を再び取り上げ、子どもたちがステージ前で指揮棒を振ってオーケストラを動かせる場を用意した。ここでは子どもたちに「指揮」の方法を親しみやすく伝えるための工夫を施した。MCは「じゃんけん・じゃんけん」というリズムカルなフレーズを使い、子どもたちが自然に2拍子の指揮パターンを体感できるよう導入。さらに、このリズム練習をきっかけにオーケストラが《さんぼ》を演奏し、子どもたちが自分たちのリズムが音楽につながる瞬間を体験する場を提供した。

MC 進行（指揮者による）：

**1. 導入** 「みんな、最初の曲で、舞台の前に立ってこの棒を振っていたこと、覚えているかな？ あれは『指揮』といって、手やからだの動きで演奏しているんです！」

**2. 指揮の体験への誘導** 「じゃあ、みんなも、オーケストラのおねえさんたちといっしょに、指揮やってみよう！これから指揮のやりかたについて、みんなに説明します。」

**3. 指揮の基本ジェスチャー紹介：**じゃんけんとの関連付け 「指揮は、ジャンケンと一緒に！みんな、じゃんけんしてみよう！じゃんけん・ぼん！（譜例 A）（子どもたちとじゃんけんする）どうかな？かったかな？まけたかな？」（子どもたちが既知の動作＝じゃんけんを用いて指揮動作への理解を深める）

**4. 2 拍子パターンへの移行** 「今度は、じゃんけん・ぼん、とはいかず、じゃんけん・じゃんけん・じゃんけん……と続けてみよう！さいしょはグー！じゃんけん・じゃんけん…」（譜例 B）（子どもたちが「じゃんけん・じゃんけん・じゃんけん…」と繰り返し、手を動かす。この反復的なジェスチャーが2拍子パターンとなる）

**5. 成果の確認と実演** 「そうそう！とってもじょうずだね！じゃあ今度は、おにいさん（MC・指揮者）がお手本を見せるよ。『じゃんけん・じゃんけん』を使ってオーケストラ

を指揮してみるから、みててね！」

（MC が 2 拍子で指揮を振り、オーケストラがそれに合わせて《さんぽ》の冒頭部分を演奏。

「じゃんけん・じゃんけん・じゃんけん・せーの」の合図（譜例 C）で開始する。MC は演奏中も「じゃんけん」をマイクを通して発し続け、子どもたちが指揮の基本パターンと音楽の流れとの関係を体験的に理解できるようにする）

**6. 全体での指揮体験** 「わかったかな？『じゃんけん・じゃんけん』と続けることで指揮ができるんだね！じゃあ今度は、みんなでいっしょにオーケストラを指揮してみよう！『じゃんけん・じゃんけん・じゃんけん・せーの』で演奏をはじめるよ！準備いいかな？」（譜例 D）

（子どもたちと MC が一斉に「じゃんけん」を繰り返し、合図でオーケストラをスタートさせる。子どもたちが全員で指揮を疑似体験する）

**7. 個別指揮者体験の実施** 「じゃあ、みんなの中で、オーケストラを前で指揮してみたい子、いるかな？今から 3 人選ぶから、元気に手をあげてね～！」

手を挙げた子どもの中から 3 名が選ばれ、一人ずつステージ前に立つ。オーケストラは、子どもの動きを見ながらテンポを合わせようとする。子どもの指揮を振る腕がゆっくり動けば音楽はゆったりと、速く動けば音楽は速くなる。指揮棒を握った子どもたちは、自分の動きと音楽が直結する感覚を体験した。オーケストラ側も、子どもたちの指揮に柔軟に対応し、参加者が「音楽に参加している」という実感を得られるよう配慮した。



写真 2 指揮者体験の様子

**A** **B** **C**

じゃん けん ポソ! じゃん けん じゃん けん じゃん けん じゃん けん じゃん けん せー の!

**D**

ここからオーケストラはいる  
(あ る こう あ る こう)

じゃん けん じゃん けん じゃん けん せー の! じゃん けん じゃん けん じゃん けん じゃん けん

譜例 A～D 指揮者体験

**(8) 《ハンガリー舞曲第5番》（鑑賞セッション②／約3分）** J. ブラームス作曲、演奏：京都女子大学交響楽団

プログラム後半では、クラシック音楽からの選曲として、テンポの緩急や強弱の変化が明確で、音楽的な対比が際立つ本楽曲を取り上げた。直前まで子ども達が従事していた「時間」「テンポ」「拍子」などの実際的な体験をふまえて選曲した。今回は子ども向けにテンポの変化を誇張し、ゆっくりな部分から急速な部分へとダイナミックに移行するなど、音楽の「伸び縮み」を感じ取れるような演出を加えた。

指揮者 MC：「この曲は、「じゃんけん・じゃんけん」の“テンポ”がのびたりちぢんだりするよ。最初はゾウさんみたいにおも〜く、あとでリスさんみたいにすばしっこくなるんだ。いろんな動物さんを想像しながら、お耳で楽しんでね！」

**(9) 《マツケンサンバ II》（終曲、鑑賞セッション③／約4分）** 宮川彬良作詞作曲、演奏：交響楽団と管楽器ゼミの合同

最後を飾る曲として、華やかで軽快な《マツケンサンバ II》を選曲した。パーカッションの強調やリズムパターンが子どもたちを自然に惹き込み、フィナーレとしての高揚感を醸成した。終曲では、子どもが保護者と顔を見合わせて笑顔になったり、体を揺らす姿、手拍子する様子が見られた。ステージを指さしながら足踏みする子もあり、音楽への自然な反応が生まれていた。

4. 「体験プログラム」の分析と効果の考察

本章では、京女こどもコンサートにおける体験セッション効果を分析し、その教育的意義を考察する。分析には、コンサート中に撮影されたビデオ記録と保護者アンケートの結果を用いた。具体的には、ステージに向けたカメラ1台、客席に向けられたカメラ3台を配置し、会場全体を録画した。また、事前に申し込みをした56組のうち、54組からアンケートを回収し、乳幼児の反応を調査した。

本コンサートではまず、《どんな色がすき》《手をたたきましょう》《おもちゃのチャチャチャ》の3曲を通じて、子どもたちが能動的に音楽へ関わる機会を提供した。また、続く《勇氣100%》は本来鑑賞セッションとして想定していたものの、直前の3曲の影響を受け、体験セッションの様相を帯びてきたため、本章ではこれら4曲を「体験プログラムA」と呼称する。

同様に、「指揮者体験」とそれにつづく《ハンガリー舞曲第5番》も、「リズム」「テンポ」「ジェスチャー」という共通項が影響し、一連の体験セッションの様相を見せたため、これら2つをまとめて「体験プログラムB」とする。

本章では、前述のアンケート結果とビデオ観察データを用いて、これら体験プログラムAおよびBの特性と子どもたちの反応を分析し、その教育的効果を検証する。

4.1 体験プログラムAの分析

4.1.1 アンケート結果の分析

体験プログラムAに含まれる《どんな色がすき》《手をたたきましょう》《おもちゃのチャチャチャ》の3曲について、保護者アンケート<sup>2</sup>で子どもの反応を記述してもらった。さらに、《勇氣100%》を加えた体験プログラムA全体についてもビデオでその様子を確認した。アンケートでは、乳幼児が各楽曲中にどのような行動を示したかを以下の3つのカテゴリ（手を叩く、体を揺らす・踊る、声を発する）に分類し、表2にまとめた。

表2 年齢別の行動表出頻度（アンケートより）<sup>3</sup>

年齢	n	手を叩く	体を動かす	声を発する
0歳	7	0 (0%)	2 (29%)	0 (0%)
1歳	18	10 (56%)	8 (44%)	5 (28%)
2歳	7	5 (71%)	5 (71%)	3 (43%)
3歳	6	4 (67%)	4 (67%)	3 (50%)
4歳	6	4 (67%)	3 (50%)	4 (67%)
5歳	10	7 (70%)	5 (50%)	6 (60%)
合計	54	30 (56%)	27 (50%)	21 (39%)



表 2 から、年齢が上がるにつれて「手を叩く」「体を動かす（体を揺らす・踊る）」といった身体的反応が増加すること、「声を発する（歌、掛け声など）」行動も特に 3 歳以降で増加傾向にあることが分かる。0 歳児では手を叩く行動がほとんど見られず、保護者の膝上で静かに揺られる程度の反応が多かった。

#### 4.1.2 ビデオ観察による分析

ビデオ観察データを用いて子どもたちの行動を分析した結果、以下の傾向が確認された。

##### ○《どんな色がすき》

コールアンドレスポンスについては、最初から自発的に参加しようとする姿勢が見られた 4 回目のレスポンスでは、4～5 歳児を中心に、タイミングよく、自信を持って「きいろ！」などと色名を答えていた。2～3 歳児の中にはサックス奏者の指の動きを模倣しようとする子もいた。

体験セクションの一曲目の楽曲であったことも影響してか、0～3 歳児の多くは演奏に対して関心を示さなかったが、楽曲の進行とともに演奏者への注視が多く観察されるようになった。

##### ○《手をたたきましょう》

2 歳児頃から手を叩く動作が見られ、タイミングに遅れがある子もいたが、「たんたんたん」のリズムを理解して手を叩く子が多かった。

4～5 歳児では、求められるタイミングで手を叩くことに加え、「リスさん」の部分でテンポが上がった際に速いテンポに追いつこうと楽しんでいた。

一部の 5 歳児は手拍子に加え、大きく足踏みするなどの追加的な身体表現も見られた。

##### ○《おもちゃのちゃちゃちゃ》

0～1 歳児は保護者の膝の上で揺られていることが多かったが、曲の進行とともに舞台への興味が増し、特にサックスからトロンボーンに旋律が変わる部分で注視するなど、興味を示す子どもが現れた。

3 歳以上の幼児は、「おもちゃの『ちゃちゃちゃ』」の部分で手を叩くことができ、同時に歌っている子どもも複数いた。一方、『(休符)ちゃちゃちゃ』おもちゃの」の部分では、年齢の高い幼児でも、求められたリズムを打つことが難しい様子だった。

##### ○《勇氣 100%》

当初は「鑑賞セクション」と位置付けていたが、実際の演奏中には手拍子や歌唱などの参加型行動が自然発生的に見られ、実際には体験的なセクションとなった。また、サビに入ると、子どもたちが自然と歌い出し、5 歳児はリズムに合わせて踊る姿が確認された。

アップテンポな曲調により、会場全体が生き生きとした雰囲気となり、子どもたちがより能動的に音楽に参加しようとする様子があった。

#### 4.2 体験プログラム A の考察

アンケート調査とビデオ観察の結果から、体験プログラム A が子どもの音楽への能動的な関与を促進していることが明らかとなった。特に、1～5 歳児の保護者からは、子どもたちが具体的な行動（手を叩く、声を出すなど）を通じて積極的に参加していたとの報告が多かった。これは、体験プログラム A が子どもたちに音楽体験を深める機会を提供し、リズムを通じた身体的な関与が幼児の発達に寄与していることを示唆している。

ビデオ観察データでは、年齢に応じた具体的な行動パターンが確認された。0～1 歳児は主に保護者の動作に依存しつつも、曲の進行とともに舞台や演奏者への興味を示し始めた。2～3 歳児は手を叩く動作や色名の発話など、リズムや言語的要素への関与が増加し、4～5 歳児ではより複雑な身体表現や歌唱、踊りが見られた。

アンケート結果とビデオ観察データを総合的に分析することで、体験プログラム A が子どもの音楽への関与を多面的に促進していることが確認された。特に、年齢に応じた具体的な行動パターンの変化が見られ、プログラムの構成が

子どもの発達段階に適していることが示された。また、《勇気 100%》が当初の鑑賞セッションとは異なり、自然発生的な体験型行動を誘発していた点は、プログラム分類の柔軟性を示唆している。

#### 4.3 体験プログラム B の分析

ビデオ観察データを用いて子どもたちの行動を分析した結果、以下の傾向が確認された。

##### ○指揮者体験

子どもたちが「じゃんけん・じゃんけん」のジェスチャーを通じて指揮動作を体感し、その後オーケストラと連携してテンポや拍子を操作する試みが行われた。

0～1 歳児:保護者の介助により指揮動作を模倣。

2～3 歳児:タイミングに遅れがあるものの、手を動かし続ける姿勢が見られる。

4～5 歳児:拍子を比較的正確に取り、オーケストラの演奏に同期した動きを示す。

##### ○《ハンガリー舞曲第 5 番》

テンポ変化やリズムの緩急が、子どもたちの興味を引き、指揮者体験との相乗効果によって音楽への関与を深めた。

急激なテンポの変化について記述する。子どもたちは最初ゆったりとしたテンポに合わせてリズムを取るが、急速にテンポが加速する場面では特に 4～5 歳児が「じゃんけん」のジェスチャーを用いてテンポを取ろうと努力する姿が見られた。

中間部での集中低下と再び興味が湧く瞬間について記述する。緩やかな中間部では一部の子どもが集中力を失い保護者との会話に移る場面が確認されたが、主題が再現される部分で再び舞台に興味を示し、飛び跳ねたり、手拍子を再開する姿が多く見られた。

#### 4.4 体験プログラム B の考察

指揮者体験では、子どもたちが実際にオーケストラを動かす感覚を体験し、テンポや拍子といった基礎的な音楽要素を身体を通じて理解す

る様子が確認された。一方、《ハンガリー舞曲第 5 番》では、テンポの変化を体感することで音楽の伸縮性やダイナミズムを学ぶ機会が提供された。指揮者体験で身につけたリズム感覚が、クラシック曲の鑑賞への理解を自然な形で深める効果をもたらした。

#### 5. アンケートによるコンサートの評価の分析

本章では、アンケート調査の結果を分析し、コンサート全体の企画内容および子どもの興味・関心喚起に対する評価を明らかにする。

##### 5.1 アンケート回答者概要

本分析では、年齢別（0～5 歳）の保護者アンケート回答を集計したものを用いる。回答総数は 54 名（0 歳児〔保護者〕7 名、1 歳児 18 名、2 歳児 7 名、3 歳児 6 名、4 歳児 6 名、5 歳児 10 名）である<sup>4</sup>。

##### 5.2 企画内容に対する評価

「企画内容はどう思われましたか？」の設問（選択肢：大変良かった／やや良かった／どちらともいえない／あまり良くなかった／良くなかった）において、54 名中、「大変良かった」または「やや良かった」以外の回答がなかった点は特筆に値する（表 3）。全体を通して、「大変良かった」が 85%を占め、「やや良かった」を含めると 100%が肯定的評価を示している。特に 0 歳児保護者は全員が「大変良かった」と回答しており、年齢を問わず本コンサート企画への保護者満足度が非常に高いことが示された。

表 3 企画内容評価（年齢別内訳）

年齢	n	大変良かった	やや良かった	他の選択肢
0 歳	7	7(100%)	0 (0%)	0
1 歳	18	16(89%)	2 (11%)	0
2 歳	7	6 (86%)	1 (14%)	0
3 歳	6	4 (67%)	2 (33%)	0
4 歳	6	5 (83%)	1 (17%)	0
5 歳	10	8 (80%)	2 (20%)	0
合計	54	46(85%)	8 (15%)	0

### 5.3 子どもの興味・関心喚起に関する評価

「プログラムの内容は子どもたちの興味・関心を引き出す内容と思われましたか？」という設問（選択肢：大変そう思う／そう思う／どちらでもない／そう思わない／全くそう思わない）については、回答者全員が「大変そう思う」または「そう思う」を選択しており、100%の肯定的回答が得られた（表 4）。これは、全ての年齢層で、本コンサートが子どもの興味・関心を喚起する上で有効だったことを示唆する。

表 4 企画内容評価（年齢別内訳）

年齢	n	大変そう思う	そう思う	他の選択肢
0 歳	7	4 (57%)	3 (43%)	0
1 歳	18	13 (72%)	5 (28%)	0
2 歳	7	5 (71%)	2 (29%)	0
3 歳	6	5 (83%)	1 (17%)	0
4 歳	6	5 (83%)	1 (17%)	0
5 歳	10	5 (50%)	5 (50%)	0
合計	54	37 (69%)	17 (31%)	0

### 5.4 アンケート結果のまとめ

本コンサートのアンケート結果から、以下の点が明らかになった。

#### ○企画内容への高い評価

保護者の回答者全員が企画内容について「大変良かった」または「やや良かった」と評価しており、特に「大変良かった」という評価が全体の 70% 以上を占めている点は注目に値する。0 歳児保護者では全員が「大変良かった」と回答しており、全年齢層で満足度が非常に高いことが示された。この結果から、本コンサートが保護者の期待を十分に満たす内容であったことが明確にわかる。

#### ○子どもの興味・関心喚起の成功

「プログラムは子どもたちの興味・関心を引き出す内容だったか？」という設問においても、全回答者が「大変そう思う」または「そう思う」を選択しており、子どもの興味や関心を喚起することに成功していることが示された。特に年齢が低いほど「大変そう思う」の割合が高く、

0～2 歳児の保護者は約 80% 以上がこの選択肢を選んでいる。これは、低年齢児が音楽体験を通じて新たな興味を引き出された可能性を示唆している。

#### ○年齢による評価の傾向

年齢別の評価を比較すると、0～2 歳児の保護者はより高い評価を示す傾向がある一方で、年齢が上がるにつれて「やや良かった」「そう思う」など、やや控えめな回答が増える傾向が見られた。これにより、年齢層に応じたプログラムの適合性や工夫が今後の改善点として挙げられる。

これらの結果から、本コンサートの企画内容とプログラム構成が保護者および子どもの期待に応えるものであり、特に乳幼児の興味や関心を喚起する上で非常に有効であったことが確認された。また、低年齢児においてより強い評価が得られたことは、早い段階から音楽体験を提供する意義を示すものである。一方で、年齢層による評価の差異に基づき、今後のプログラム構成において年齢別の関与や興味により細かく対応する工夫が必要であると考えられる。

アンケート結果は本コンサートの教育的意義を裏付けるものであり、体験セクションと鑑賞セクション、教育セクションを柔軟に組み合わせる構成の有効性を示している。

### 6. おわりに

本研究では、「京女こどもコンサート」を事例に、リズムを中心とした乳幼児向け音楽プログラムの教育的意義を検討した。体験・鑑賞・教育を組み合わせた構成により、乳幼児は家庭や保育現場を超えた公共の場で音楽と関わる機会を得た。

ビデオ観察と保護者アンケートの分析から、年齢や発達段階に応じて子どもたちの参加様式が変化し、リズムやテンポの変化に対する関与が多面的な音楽理解を促進することが示された。特に、リズムを通じた身体的な参加が幼児の音楽的理解と興味喚起に寄与していることが示された。

しかし、本研究はサンプルサイズが 54 組に限定され、特定地域に集中していると思われるため、結果の一般化には限界がある。また、保護者アンケートとビデオ観察に依存しており、主観的バイアスの影響を受ける可能性がある。さらに、単一のコンサートイベントを対象としているため、長期的な効果は検証できていない。今後の研究では、多地域での調査や継続的なデータ収集が求められる。

将来的には、個別の年齢（発達段階）、多様な興味に対応したプログラム設計と、効果の長期的な検証が課題となる。今回の知見が乳幼児の音楽教育を深化させ、持続的な発展につながることを期待する。

#### 補. アンケート設問一覧<sup>5</sup>

- 「プログラムの内容は子どもたちの興味・関心を引き出す内容と思われましたか？」  
大変そう思う／そう思う／どちらでもない／そう思わない／全くそう思わない
- 「企画内容はどう思われましたか？」  
大変良かった／やや良かった／どちらともいえない／あまり良くなかった／良くなかった
- 『『どんな色がすき』『手をたたきましょう』『おもちゃのチャチャチャ』演奏中のお子さまの様子をお聞かせください』自由記述
- 「今回のイベントについてご感想・ご意見をお聞かせください。（希望する企画などご自由にお書きください）」自由記述

#### 注

- 1) Vn.「山崎晴子」は「山崎晴子」の誤り。
- 2) 1つの申し込みに対して複数の子どもを連れた観客については、アンケートではより年齢の低い子どもの反応を記述している。そのため 72 名の乳幼児が来場していたのに対し、アンケートで反応を調査できたのは提出された 54 人分である。なおアンケート内容及び場内ビデオを本研究に用いることは事前に観客らの許諾を得ている。設問一覧は「補」を参照の

こと。

- 3) 小数点一位を四捨五入した。以下の表も同様。
- 4) 注 2 と同様。
- 5) この一覧からは、本研究と関係がないと考えられる設問（園の運営に関わる設問など）が除かれている。

#### 引用文献

- 稲生涼子（2021）, 「幼稚園教育要領における領域「音楽リズム」の内容の変化」『音楽研究：大学院研究年報』（国立音楽大学大学院）33, 205-216. doi: <https://doi.org/10.20675/00002394>
- 岩崎光弘（2012）, 『リズムの良い子に育てよう：リトミックってなあに』東京：ドレミ楽譜出版社。
- ジャック=ダルクロズ, エミール. (2003). 『リズムと音楽と教育』板野平監修, 山本昌男訳. 東京：全音楽楽譜出版社. [É. Jaques-Dalcroze (1920). *Le rythme, la musique et l'éducation*. Paris: Librairie Fischbacher.]

#### 謝辞

本コンサートの実現にあたり、京都幼稚園の松田幸恵先生、発達教育学部教授の荒川恵子先生、京都女子大学交響楽団の皆様、ならびに京都女子大学発達教育学部教育学科音楽教育学専攻の管楽器ゼミの皆様にご協力いただきました。また、川村学園女子大学の大澤里紗氏には本稿の閲読をご担当いただきました。深く感謝申し上げます。